第５章　21世紀に生きる
～新しい時代のさまざまな実践に学ぶ～

第１節　（実践１）「今、光っていたい」
～導入にインターネットを使って～

1　生徒とインターネットを使って日航機墜落事故について調べてみましょう

(1)　日航機墜落事故のトピックへのアクセスの仕方

①　「日航機墜落事故」で検索をすると関連記事を簡単に見つけることができる。

②　代表的なアドレスは

http://www.fps.chuo-u.ac.jp にアクセスし、日航ジャンボ機御巣鷹山墜落事故をクリックすると、事故の経過やジャンボ機と管制塔の交信記録などを知ることができる。

(2)　インターネットを使う前に「上を向いて歩こう」の曲を流し、この歌を歌った坂本九さんが日航機墜落事故で亡くなっていることを知らせるのも、日航機墜落事故を調べる動機づけに有効かと思われます。インターネットで「坂本九」を検索することもできる。

2　この日航機墜落事故の悲劇に散った「愛子さん」を取り巻く人々の中に「人として生きるすばらしさ」が息づいています。愛子さんのお父さんが書いた「今、光っていたい」を読んでみましょう。

3　次の点に留意して話し合ってみましょう。

(1)　「今、光っていたい」を読んで、一番印象に残ったことはどんなことか。

・部落問題以外にも印象に残るところがあるので、その生徒の思いを自由に語らせる。

・一人一人の意見を大切にし、どうしてそこが印象に残ったのかを話し合う。

(2)　愛子さんのお父さんが言いたいことはどんなことだと思うか。

(3)　生徒Ｔさんの感想文についてどのように感じたか。

・愛子の恋人や親に対して「すごい」と多くの生徒は思うだろうが、この「すごい」と思うことに疑問を感じている生徒の作文を読ませ、これからの生き方を考えさせたい。

（ねらい）

・導入場面でインターネットを使うことができる。

・「今、光っていたい」の資料は明るい展望の持てる資料である。墜落事故の悲劇的な話ではあるが、人を真に大切にしようとする人達の生きざまから、これからの自分たちの生き方を考えさせたい。

◇「インターネットを利用する子どものためのルールとマナー集」(電子ネットワーク協議会)

http://www.enc.or.jp/enc/code/rule 4child（教師・保護者版も）などにて、インターネット利用のマナーも学び合おう。

〔教材５―１〕

「今、光っていたい」～娘の遺してくれたもの～

田　中　　蔚（しげる）

人を愛し愛さる人に　育てよと
名づけし「愛子」　空に散り逝く

昭和60年８月12日、娘が日航機墜落事故で遭難した。娘は体育の教師をしていた。御巣鷹山の山奥で傷があれば自分で止血し、夜露を飲んででも必ず生きているにちがいない。そう信じて現地へ馳せ着けた。事故は凄惨を極め想像を絶していた。蒸し風呂の体育館に漂う線香と遺体の臭気の中に、性別不詳、年齢不詳と記された柩が並ぶ。

バラバラ遺体の中を気が狂ったように捜し求めてわが子にやっと巡り合えたのは７日目であった。娘の柩には「中学生」と書かれていた。妻が「この手、愛子の手や、指と爪の切り方が愛子や」と言う。

「どんなに変わり果てた姿であろうと、せめて一晩わが家の畳の上に寝かせてから葬ってやりたい」という妻を説いて遠い高崎の地で荼毘にふした。来春の結婚に夢みたであろうウエディングドレスを着せ、好きだったテニスのボールを左手に握らせて…。

花嫁の　衣装を着せて　荼毘にふせし
骨を抱きて　などほほ笑める

一条の煙と共に白骨と化したその遺骨を抱きしめたとき、とめどなく流れる涙と共に「よう帰って来たのう」と思わずほほ笑んだ私。

一緒に同道した婚約者の姿がいじらしかった。彼はこの事故の一カ月程前に「愛子さんとの結婚を認めてください」とわが家を訪れた。「うちは同和地区ですよ」「愛子さんから聞いています。両親がお盆にお願いに来る筈です。」これが彼と交わした最初の会話であった。

そして奇しくも遺体収容の藤岡市の体育館で両家の親が対面した。私が同和問題に触れたとき、お父さんは「私は教師です。少なくとも人さまに平等を説く人間として自分を偽るようなことはようしません」といわれた。私は返す言葉もなかった。

娘の縁談を聞いたとき「それでも親戚の中には反対の人がいるかも」とか「娘が先々思い悩むのでは」と、あれやこれやと思い過ごしていた自分が恥ずかしかった。こんなお父さんや彼だったからこそ「私は部落の生まれなんよ」と重いことばを打ち明けることができたのだろう。「これからも息子をお宅の家族の一員に加えてお付き合いさせてください」とお父さんはおっしゃった。

お盆休みの休暇が切れ、いくら勧めても彼は職場に帰ろうとはしなかった。疲れ果てた

妻の肩をもみ、私に濡れタオルを絞り、買い物や電話の対応や遺体の確認に奔走した。

遺体の見つかるまでの一週間、娘が神戸を発つ時の服装や持ち物、歯型などの情報を持って数人の友達が阪神や和歌山から駆けつけてくれた。いずれも大学時代やその後のスポーツ仲間だった。葬式がすんでからも四国や岡山から友達が訪ねて来る。友情とは何なのか。愛とは何なのか。ひとかどに愛の道を人に説いてきた私に果たしてそれができるのか。愛とは人に説くことではなく行うことなのだ。それを私は教えられた。

四十九日がすんでから彼は半畳分もある大きな娘の肖像画を持ってきた。娘の面影が鮮やかに描かれていた。「仕事の合間に毎晩絵筆をとる間だけが心安まるときなんです。愛子さんに会いたくなればこの絵を見にきます」と。四十九日を１つの区切りに思いを断ち切らせたいと願った私だったのだが。

人の命には限りがある
だからこそ自分の思うように生きたい
人は軽く、10年先、20年先を口にするけれど
そのときを大切にしなければ
今、光っていたい

娘の絶筆である。「今、光っていたい」の思いを遺して娘は還らぬ人となってしまった。朝夕仏壇に合掌するたびに、唱えるべきお経を知らない私はこの詩を口ずさむ。いつの間にかフシのつくようになった詩を口ずさみながら、私は水平社宣言のさいごにある「人の世に熱あれ、人間に光あれ」の西光万吉の言葉とが重なり合って、今日も静かに手を合わせる。

あれから８年の歳月が流れた。青春のまっただなかに散った花のあとにいくつかの実が残された。その種が今、私の生き方を導き、そして支えてくれる。かつての婚約者は今は２児の父親となったが家族で時々わが家を訪れて来る。その奥さんに出合うたびに「娘が生きていれば」と私は涙ぐむ。妻は「愛子が孫を連れて帰ってきた」と喜ぶ。

いつかその奥さんが「私、父いないんです。父はお酒が好きで、私が高１の時、肝硬変で亡くなりました。お父さんもお酒をほどほどにして、父の分まで長生きしてね」という。この人には「ここは主人の以前の婚約者の家だ」とか、「ここは同和地区なのだ」とかの思いはみじんもない。人を信じ切っているのである。

娘の招きなのか、私はよく群馬へ講演に出掛ける。そのたびに人々の温情にふれる。昨年は赤城山麓、宮城村の方が子供連れの家族４人で、今年は高崎市倉賀野中学校のPTAの方が十人、御巣鷹山に登って娘の墓に花を添えてくださったという。富岡市の茂木さんが丸一日をさいて車で山を案内してくださった。いずれも車で山の麓まで往復７～８時間の道程である。

仏のような人々の情にむせびながら娘の墓前にぬかずくと「お父さん、人を恕(ゆる)し、信じてね」娘は私に語りかけてくる。　　（「感性に問う人権啓発」　田中蔚　明石書店）

【教材】

生徒感想「**娘の遺してくれたもの**」で学んだこと　T．T

最初、「娘の遺してくれたもの」を読んだとき、同和地区と聞いても差別をしない愛子の彼と、彼の父親のすばらしさに驚いてしまった。愛子の彼と彼の家族には差別の心はみじんもなくて、愛子さんとの結婚を真剣に考えていた。そんな人たちだったから、愛子さんは自分が同和地区だということを打ち明けることができたし、もし、日航機墜落事故がなく愛子さんが生きていたなら、愛子さんと彼は結婚していたと思う。また、愛子さんのお父さんの言いたいことは、「部落差別のない人達もいるよ。そして、こんな人達がもっと、もっと増えてほしい」ということだと思った。

しかし、良く考えて見ると、同和地区とかにこだわることなく結婚することは当たり前のことなのに、「すごい」と思ってしまう自分自身の心に疑問を感じた。心の底の底にある自分自身の差別心に気が付いた。つまり、僕は、今まで差別心はなくて、愛子さんの彼と同じように「普通の行動」ができていたと思っていたが、愛子さんの彼の結婚に対する普通の行動を見て、「すごい」と感じたことは、どこか僕の心の中に部落差別の心があるのではないかと思った。今回、この資料でそういう自分に気づくことができたので、愛子さんの彼のように「ごく普通の行動」ができるように努力していきたいと思う。

そして、部落差別に限らず、クラス内のいじめなど自分の身近で起きている差別にも気が付き、真剣に考え、行動しなくてはいけないと思う。